

あ と が き

うたごえ運動のような芸術文化運動に参加している人々にとって、「客観的」な立場からの実証研究などというものはどれほど必要とされているかはわからない。「ほとんど役に立たない」として一喝される恐れは十分ある。しかし、本研究で筆者が個人的に述べたかったのは、教育研究にはよくあるような、研究者と実践の関わりの問題であったのかもしれない。私がうたごえ運動に「関わって」しまったのは、研究者の卵（大学院修士課程1年）になったばかりの1975年のことである。当時の自分自身の立場は、この経験をもとに書き上げた修士論文の「導入」（執筆1976年12月＝高平レコーディングの真っ最中）に示しておいた。かなり長くなるが、その部分を資料として掲載することにする。

大学院生というものは不安定なものである。研究者といえば聞こえがいいが、要するに書生のことであり、相撲の位でいえばマスターなどは序の口か三段目といったところであろう。事実、全国院生による奨学金三原則実現に向けての街頭宣伝では、「私達院生は20歳をはるかに越しているわけで、今さら親のスネかじりもできないのであります…」という訴えが聞かれるのである。まったくそのとおりである。

私も寮生活6年目を向え、そろそろ若い世代から「若年寄」とかいう名前をちょうだいして、いわばけむたがられている存在になってきているが、いい年をした「若年寄」グループの行動は、かなり奇異の目で見られているらしい。もっとも、同じ院生でも、白衣を着て実験室に通っている理科系の院生は、まだ研究をやっているという雰囲気を感じられるようであるが、我々文科系はそうはいかない。なにしろ寝ころがって本を読んでいても研究は研究だからである。寮の後輩に向かって「教育社会学は実験講座になっている」などと説教しても、一笑に付されるのがオチであろう。

そういうなかで、私が合唱団に入るなどと言いだ出したわけであるから、寮生の中からは驚きとも軽蔑ともいえる声が聞かれたのは事実であった。とにかく、大学生活の四年間は文化活動と名のつくものとはまず縁がなかったし、ことに「歌って踊って」式のものは、ハナからバカにしていた気味があったからである。しかし、初めにまずことわっておきたいのは、私が合唱団に入ったのは何とんでも自分の研究のためであった。私は教育を研究するためには、何よりもまして、現場をよく知らなければならぬと考えていた。そして、教育の研究は最終的には現場の教育実践へと帰っていくものであるとも思っていた。ちょうど社会学の調査研究者が、自分のフィールドを特定の地域にもつように、私もじっくり腰をおちつけて研究のできるフィールドをみつけれそうと考えたからであった。

研究者として以上の意欲は正当に認められるべきものであると思う。しかし、私は自分のとってきた研究の態度を自己弁護しているのではない。そうではなくて、ことさら初めにことわっておいたのは、一年以上の「調査」を通じて、自分が最初もっていた調査研究に対する位置づけが、なんと薄っぺらなものであったのかが、今にな

ってはっきりとしてきたからである。

現場に入るということ、現場に入って研究をするということは、調査者という存在はある意味では許されないものであった。少なくとも研究のためだけで現場に入っているということはできないものであった。調査というものは、客観的にものごとを見つめ、客観的に分析を行うことが理想であるが、現場での活動では、客観的などというものは、自分が主体的にとりくまないかぎり現れてこないものであった。また、主体的にとりくんでこそ、はじめて成員の「生の声」「ホンネ」というものは把握できてくるものであった。要するに、研究者が調査しようとする事象にどうとりくんでいくのかという態度が常に問われてきたわけである。そういう意味では、活動の渦の中に入っていけば、一とおりの調査研究ができるなどと考えていた当初の自分の考えは、研究者としては大きなまちがいであったことに気づいたわけである。(中略)

……このような事情の中で、次第に自分は合唱団に主体的にかかわらざるを得なくなったわけであるが、これを決定的なものにしたのは団の常任指揮者T氏との交流からであった。

T氏は、電報局に働く労働者であるが、「うたごえ」運動の古くからの活動家で、アマチュアの作曲家である。とりわけ宮城県の「うたごえ」運動の中心であるS合唱団の委員長としても多忙な生活を送っている。彼はいわば私達の合唱団の育ての親として、半ば奉仕的にレッスンのめんどろをみてくれているわけであるが、団の方向性に関しては、「うたごえ」運動での自分の経験を話すだけで、一切口をはさまない。ある意味では、彼もまた私達のサークルの自己展開を「観察」しているのかもしれないし、または、「うたごえ」運動の新しい質をもった型をこの合唱団に見いだすべく、じっくりと見守っているのかもしれない。

私の興味もまずT氏の活動に注がれた。殺人的なスケジュールの中で創作もし、いくつもの合唱団のめんどろを見ている彼の音楽観や人生観、また、勤めている会社内でのアカ攻撃、労働組合内部からまでもしめつけの中で、なぜ40才をすぎた今になっても、このような活動を続けているのか、彼のこの活動を支えているものはいったい何なのか等々、こういった人々がいわば「下から」の文化運動、自己教育運動を支えているとは知ってはいても、今さらのことながら驚かされたからである。

このT氏が作品集を出版し、全国でも初めてといわれているアマチュア作曲家の個人作品発表会（器楽演奏から合唱、独唱までを含む本格的な演奏会）が76年1月に多くの協力の中で（井上頼豊氏をはじめとする多くの専門家、うたごえ関係者、その他の有志）開かれることになった。私達の合唱団も日ごろお世話になっている関係上、全面的に応援したわけであるが、この演奏会に主体的にとりくむ中で、T氏という人物像がよりはっきりとうかびあがらすことができたように思える。事実、この活動を通じて初めて、私はT氏とじっくり話し合うことができたからである。

マスコミ関係からも注目をあびたこの演奏会において、ある記者からの「『うたごえ』をやっていて苦しかったことはどのようなことですか」との質問に対して「苦しいことなど一つありませんでした」と答えている。ところが、この一言はかなり重みの

ある言葉であった。後で私のインタビューに対して話したことには、その時まず考えたのは「苦しくなかったことなんかあったらどうか」ということであったそうだ。ところが、よく考えてみると、苦しみはリーダーとして人一倍多く、喜びはみんなといっしょであるというこのワリの悪さというものは、自分にとってみれば、生きるための発見、発明、創造の活動を必死になってやっている時であり、それを無償でやっているからこそ、人間が動く姿をみられる喜びも味わえるということ、つまり、すべてが自分のためになっているということが実感されることである。だから、前にあげたような答えを返したというわけである。

その奥には、彼が好んで使う「仲間」というものに対する信頼感、「仲間」のすばらしさを実感できるように自己を形成してきた者の真実のことばがあったように感じられたのである。合唱団のような自主的サークルは、社会学の用語で言えば「機能集団」というカテゴリーに入るものと考えられる。しかし、この「仲間」というものは、「機能集団」とはまったく別のカテゴリーであることに気づいたわけである。そして、それまでの私の調査からでは、「集団」は把握できても「仲間」というものは理解できなかったように思えたのである。

ところが、自己教育や、教育学にとって、このような集団から価値をひろってみると、そこには「仲間」という概念をつかみだすことがどうしても必要であることに気づいたのである。「仲間」というものは、単に集団の一員であるということだけでは絶対にわからないものである。それは、集団のかかえている問題をまさに自分の問題として、自分のプリズムを通してとらえかえさなければ理解できないものであった。私自身にとってみれば「研究のために」などという抽象的なことではなくて、まさに「何のためにその研究をやるのか」ということがまず問い返されなければならないことであった。また同時に、「教育とは何か」などという一般的な問いに対して、なぜ実践の現場を通じて吟味しようとしたのかということも考え直さなければならないことであった。

それは、「教育とは何か」と問うことを、抽象的な空虚なものに終わらせることなく、実践的状况の中で生きて働いているものの実意をとらえることによって教育的価値を追求していくなかに、調査研究者として主体的にかかわっていくことにちがいない。こういった中でこそはじめて「調査研究者と被調査者との相互信頼の場を発見し、あるいは創造し、研究生活と研究対象の生活の触れあいを通じて、現実のもつ構造、機能その過程が示す本質について学びと」（中野卓）れるような調査となることができるのではないだろうか。（後略）

今回の研究は、20年以上前に抱いた上記の課題に対するものに位置づけられるが、まとめる歴史をいつの時点までにするかは大きな問題でもあった。本文にもあるとおり、現在仙台合唱団は長い「停滞期」である。研究をまとめている間に、「未来に向けた展望を指し示す」事態が起きてくれば、そうしたまとめが格好よく終わるのであるが、現実はいかなかった。何とか前進のための力になりたいと思っても、結局遠く

にいる身にとっては空回りとなったかもしれない。それでも、年表を整理したことと、これをきっかけに多くの人々に集まってもらうことはできた。どれほど役に立ったかはわからないが、久しぶりに「事柄の真ん中にいる」実感を味わえたことはうれしかった。

ここで書かれた「歴史」は、今後一人歩きをする可能性がある。しかし、実証研究（あるいは実証研究者）の常として、そういったほうり出し方はしないつもりである。今後ともデータ、資料の不備を補って、そして多くの人の手によった「歴史」を完成させていきたい。調査研究の結果は次の調査課題の提示であるからだ。

最後に、この研究を完成するにあたって、東北音楽センター井上晶夫氏をはじめ、資料を提供していただいたり、インタビューに応じてくださった、宮城県内外の数多くのうたごえの仲間みなさんに感謝いたします。

なお、この研究は、平成7年～9年度文部省科学研究費（基盤研究（C）（2）、課題番号07610163）によるものである。